

氏名（本籍）	笠原 究		
学位の種類	博士（言語学）		
学位記番号	博 乙 第 2982 号		
学位授与年月日	令和 3 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	The Effect of Known-and-Unknown Two-Word Combinations on Intentional Vocabulary Learning (既知語と未知語の2語の組み合わせが意図的語彙学習に与える影響)		
主査	筑波大学 教授	博士（言語学）	卯城 祐司
副査	筑波大学 教授		磐崎 弘貞
副査	筑波大学 教授		久保田 章
副査	東京電機大学工学部 教授	博士（教育学）	相澤 一美

論文の要旨

本研究の目的は、新たな単語を覚える際に既に知っている語をつけて「既知語＋未知語」という2語の組み合わせで覚えることにより、意図的語彙学習が促進されるかどうかを外国語としての英語（EFL）環境の中で検証することである。本研究では、(a) 2語の組み合わせで覚えることは単語単独で覚えるより有効か、(b) どのような2語の組み合わせが有効か、(c) 2語の組み合わせ学習は英語初級学習者にも有効か、(d) どのような提示方法がこの学習に有効かという4つの研究課題を7つの実験により検証した。

第1章では2語の組み合わせ学習が、日本のようなEFL環境における語彙学習においてどのような位置づけになるかを説明している。

第2章では2語の組み合わせ学習が有効である理論的背景を示している。単語学習における「記録」、「保持」、「再生」の3段階のうち、この学習法は「保持」と「再生」を促進する。「保持」を促進する概念として(ア)「精緻化リハーサル」、(イ)「補完的学習システム」、(ウ)「強化された画像性」の3つがあげられる。(ア)は、新しい知識を既存の知識と結び付けることで、新しい知識の保管がより強固になるという考え方である。(イ)は、新しい知識は海馬で処理され、しだいに大脳新皮質にある長期記憶へと移行されるという考え方である。新知識を既存の知識と結びつけることが、この移行を促進すると考えられる。(ウ)は未知語に既知語をつけることで既知語のイメージが具体的になり、より鮮明な画像性が記憶の保持に有効になるという考え方である。「再生」を促進する概念は(エ)「符号特定性仮説」と(オ)「連想連続性仮説」の2つである。(エ)は記録時に記憶した事柄（未知語）に付属していた情報（既知語）が、再生時に再び提示されることで、その事柄を思い出しやすくなるという考えである。(オ)は付属の情報（既知語）が記憶した事柄（未知語）の連想される意味範囲を狭め、再生を容易にするという考えである。

第3章と第4章では研究課題(a)について検証をしている。第3章では被験者内研究の実験1を通して、第4章では被験者間研究の実験2を通して検証した。結果はある程度英語の語彙を知っている学習者には、2語の組み合わせ学習が単独学習よりも新語の取り出しと保持に有効であることが分かった。ただし、学習時にもテスト時にも目標語は手掛かりとなる既知語と共に提示されることが条件となる。

第5章と第6章では、(b)の有効な2語の組み合わせについての検証について述べている。第5章では名詞を目標語とし、有効な既知語は形容詞か動詞かを比較した実験3の説明と、第6章では動詞を目標語とし、有効な既知語は名詞か副詞かを比較した実験4の説明を行っている。その結果有効な組み合わせは、「既知の形容詞+未知の名詞」、「既知の動詞+未知の名詞」、「未知の動詞+既知の名詞」であることが判明した。これに対し「未知の動詞+既知の副詞」は効果が劣ることもわかった。既知、未知に関わらず、名詞を用いることで学習者は再生時に「強化された画像性」が利用できた。すなわち具体的なイメージを喚起しやすくなったことが影響していると考えられる。

第7章では、(c)の英語学習初級者に対するこの学習方法の有効性に関する研究である実験5を取り上げた。結果として、初学者にとってこの学習方法は覚えた語の意味を取り出すには有効だが、その意味を長期間保持するにはあまり有効ではないことが判明した。既知語は未知語の意味検索の範囲を狭めるには有効に働く。しかし保持のための心内辞書が初級者にはまだ十分発達していないことが要因と考えられる。

第8章では「既知語と未知語の2語の組み合わせリスト」の作成過程を説明している。大規模コーパス *Corpus of Contemporary American English (COCA)* を用い、最高頻度の1,000語を既知語とし、それに続く3,000語を未知語として、両者の組み合わせを抽出した。現在およそ2万項目の「既知語+未知語」リストと1万7千項目に及ぶ「未知語+既知語」リストがオンラインで公開されている。

第9章では抽出した2語の組み合わせを用いて、研究課題(d)の有効な提示方法の検証を2つの実験で検証した。同じ目標語を含む3つの組み合わせを連続で提示する「集中提示」と、他の目標語も交えて提示する「分散提示」の2つの方法を比較したが、両者に有意な差は見られなかった。実験デザインに問題があったため更なる検証が必要である。

第10章では総合的考察が、第11章では結論が述べられている。第10章では、この学習方法が有効である理由は第2章にある5つの概念で説明できることがまとめられている。第11章では教育的示唆がまとめられている。ある程度基本的な英単語を身につけた学習者に、2語の組み合わせ学習は有効な学習方法の1つとなり得るとしている。

審査の要旨

1 批評

本研究は、既知語を未知語につけて2語の組み合わせとして覚えるという、新たな意図的語彙学習の方法を提示し、実験から導かれた知見をもとに2語組み合わせの単語リストを作成するという独創性に溢れる研究であり高く評価できる。既知語が新語を学習者の心内辞書に定着するための助けとなるとともに、思い出すための手掛かりとして働くことも実証し、教育的示唆に富む。また、その理論的背景として認知心理学分野や神経科学分野の概念を援用するなど、理論的に手堅い構成になっている。単語学習を「記銘」、「保持」、「再生」の3段階に分けて考え、このうちの「保持」と「再生」にこの学習方法が効果的であることを説明している。前者の有効性を示す概念が「精緻化リハーサル」、「補完的学習システム」、「強化された画像性」であり、後者の有効性を示す概念が「符号化特殊性仮説」と「連想連続性仮説」である。各実験結果はこれらの概念を使用して破綻なく説明されている。

本研究の主な成果は大きく以下の3つとなる。1つ目は、ある単語を覚える際に単独よりも、「既知語+未知語」の組み合わせで覚える方がその未知語の意味の保持と再生に有効であることを実証したことである。保持に関しては、既知語を覚えるべき未知語につけることで知識の保管が強固になり（精緻化リハーサル）、長期記憶への移行が促進され（補完的学習システム）、具体的になった画像性が定着を高める（強化された画像性）。また再生においては、附属情報の既知語が未知語の意味の取り出しを助け（符号化特殊性仮説）、さら

に未知語の意味範囲を限定する（連想連続性仮説）。よって学習者が既にある程度の英単語を知っているならば、この組み合わせ学習を用いることでさらに効果的な語彙増強が可能となるのである。

2つ目の成果は、名詞中心の2語の組み合わせが有効であることを実証したことである。本研究では「既知の形容詞＋未知の名詞」、「既知の動詞＋未知の名詞」の比較研究、さらに「既知の動詞＋既知の名詞」、「未知の動詞＋既知の副詞」の比較研究が行われている。名詞を目標語とした場合、既知の形容詞と既知の動詞は手掛かり語として目標語の意味の保持と再生に効果があることを実証した。一方、動詞を目標語とした場合、既知の名詞は目標語の意味の保持と再生に効果があるが、既知の副詞は再生には役立つものの、保持には大きく貢献しないことがわかった。名詞は動詞と組み合わせるとその画像性を高め、記憶保持に貢献するが、副詞は具体性に乏しく、動詞と組み合わせてもその画像性を大きく高めないことが要因である。具体的に効果的な組み合わせを特定できたことは、指導者や学習者にとっての利益となる。

3つ目の成果は、大規模コーパス COCA を使用して、日本人初中級の英語学習者のための「既知語＋未知語」リストを作成したことである。COCA の最も高頻度な単語 1,000 語を既知語とし、それに続く頻度の 3,000 語を未知語として設定した。笠原氏は両者の組み合わせを抽出したのち、入念なスクリーニングで学習に値する2語の組み合わせを選んだ。そして、「既知語＋未知語」リストは2万項目、「未知語＋既知語」リストは1万7千項目を収録し、インターネット上で公開している。日本人学習者が中学年代で1,000語以上をマスターし、高校年代でそれに続く頻度の数千語を学習することを考えると、中学校の高学年や高校生にとっては有益な学習リストであると言える。

予備審査で受けた助言等を生かし、本論文は次のような改良点が見られる。第2章では、本研究で扱う語彙知識を明確に定義している。また、なぜこの組み合わせ学習が有効であるかの論理的な裏付けを、認知心理学や神経科学の概念を用いて論理的に説明している。語彙学習を「記銘」、「保持」、「再生」の3段階に分け、「保持」と「再生」にこの学習方法が有効であることを、上記の概念を用いて論理的に説明している。更に、研究課題を含め本研究全体の輪郭を鳥瞰図で示すことで、相互の章の関係がより明確になっている。課題は第9章で活用法を検証したが、普通の授業条件下（数分間）での実験のため、残念ながら立証されなかったことであろう。しかし、成功体験ばかりの論文が多い中で、実践への安易な応用への警鐘を鳴らす、良心的な結末であると評価できる。最後に、誤植も訂正され、APA 第7版に沿った書式で原稿が書き改められている。

本論文は極めて独創的な提案であり、理論的な枠組みも精緻である。英語を外国語として学ぶ EFL 環境の教室に大きな示唆を与えることが期待され、英語教育学の理論と実践への貢献と意義は極めて高い。

2 最終試験

令和3年1月19日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。なお、学力の確認は、著者が「人文社会科学研究科論文審査等実施細則」第10条(2)に該当することから免除し、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。